ゆたかの飛耳長目〈第10回〉開催趣旨

日　時	令和4年11月30日（水）　午前10時～
場　所	安曇野市役所　3階　市役所理事者控室
テーマ	農業政策について （塾生の抱負発表/農政への意見要望/リーダーの心構えとは）
参加者	安曇野新興塾　第1期生　12人

参加者　安曇野新興塾は昨年の6月より開塾し、私達が第1期生となる。農業の未来を築くために、JAあづみ圏内で推薦選抜されたメンバーで、地域営農リーダーになるための研修を進めている。私達がこれからの地域農業を担い、将来を見据えて、その活動全体が後輩、または子・孫世代に繋がっていけるようなものを築き上げたいという志の高い思い。毎月開催する研修会では、各塾生の圃場見学、地球温暖化による農産物への影響の学習、地域作り経済学の学習、みどりの食料システム戦略の学習と発表会など、視野を広げながら討議を進めてきた。その成果によって安曇野の農業を盛り立て、食の安全、安定供給を支えるよう、また、住みたい安曇野、住んで良かった安曇野に、少しでも貢献していけたらと考えている。本日は、そのリーダーとなる私達の取り組みや課題について、安曇野市のリーダーである市長さんとの意見交換をお願いしたい。

安曇野の農産物のブランド化・地産地消・農業で稼ぐために

参加者　安曇野でとれた米、果物野菜のPRし販売していただき、市長自らが安曇野でとれた農産物をPRする試み（あずさマルシェ）は大変重要で、活動の継続を望む。

参加者　安曇野産というものが非常に取引先の企業から喜ばれていて、安曇野ブランドということで私達の商品を高く買っていただいている現状がある。そして安曇野というブランドは、農作物としてもまだまだ成長する余地があると感じている。安曇野市農業農村振興計画の中にも、「稼ぐ　守る　農と生きる」という政策があるが、稼ぐというところが実現してくると守ることに繋がり、そして農業と生きるということに繋がってくる。三つの政策の中の「稼ぐ」が充実してくることで波及していくと考えるため、弊社としても6次産業化や付加価値を高くして販売といったこともやっている。私の願いとしては、行政として大きな単位での6次化、地域内循環ということができればと考えている。安曇野の中でもそういうことは十分可能だと思っている。

参加者　市内の直売所やスーパー等も巻き込んで、余計な燃料を使わずこの地で作った分をこの地で消費する地産地消を実現していきたい。私の調べでは、管内の農業生産面積の約5割が個人農家の生産面積と想定している。兼業という形だが、個人農家の経営が多面的機能を維持していく上で重要な役割を果たしていると考える。市の調査では個人農家の4割が離農を希望しているという現状がある。個人農家の離農縮小を少しでも抑えれば、現

農家の負担が減るのではないか。小規模農家として生きがいで農業を行うという人はごくわずかで、稼ぎにならなければ営農を継続する気にはならない。若い世代になればなるほど従業者は減少している。個人農家は利益が出しにくいという中で、まずは販売単価を上げていく必要がある。販売先は直売所が中心になるが、消費者はスーパーの価格と比較してしまうため、生産コストに見合う価格で販売できてないのが実情。今後地産地消の考えのもとに、生産コストに見合う適正な価格で販売できる仕組みがあればありがたい。
農業農村振興計画にある小規模農家の流通販路の構築に期待をしている。販売所、直売所の新設、また現状の直売所の充実なども含めて、新たな販売先ができることにより、個人農家の市場が確定され、新たな市場の中から発掘された新品目が出てくるのではないかと考える。それらがやがて基幹作物や戦略品目に加わって安曇野ブランドに繋がるのではないかと思う。

参加者　7年前に夫婦で就農し、ハウスのイチゴ栽培をしている。今年22歳の甥っ子と彼女が手伝いに来てくれ、農繁期のバイトの予定だったが実際に働いてみたら興味を持ってくれたようで、今新規就農を視野に動いている。また、横浜から安曇野に移住してきた女性もパートで働きに来てくれている。農業農村基本計画の施策の柱1の「稼ぐ」2の「守る」にも通じるように、これからの安曇野を作っていくために、若者世代が農業や就農に興味を持ってもらえるような地域作り、IターンやUターンで移住されてくる人たちが、安曇野で農業を仕事として生活できるような地域作り、安曇野のブランド力で、安曇野の農業で稼げる仕組み作りなどに興味があり、協力していきたいと思っている。

参加者　安曇野ブランドの価値をさらに高めるために、有機農業やオーガニックに先進的に取り組むことを提案したい。市の振興計画でも触れられているが、まだ理解が不十分。また安曇野の観光資源を生かし、農業と観光を融合したグリーンツーリズムを推進することで、農家民泊が活発化され、その結果農家の所得の向上に繋がるのではと考えている。

市長　ブランドというのは外から見た価値がまず第1で、それで評価されることによって中にいる人間がやる気になる、という相乗効果があると思っており、安曇野の名前そのものの価値を高める取り組みを行っている。あずさマルシェではJR東日本の皆さんに大変ご協力いただき、開催期間中、新宿駅で1時間ごとにあずさマルシェの状況の構内放送をし、独自のポスターを作って山手線の各駅に掲示いただいた。JRにとっても、安曇野と組むことにメリットがある、ということを感じていただいた結果だと思っている。時期をずらしながらメディアの露出機会を増やして安曇野の農業・農産物が非常に良いというのを、何回も何回も、様々な機会を利用してPRすることが大事と思っている。ブラタモリで安曇野が取り上げられ、拾ケ堰の話やわさび田の話が出たり、銀座ながので農業を中心とした移住定住の促進を目的に、移住交流大使・篠原信一さんとのトークショーや移住相談コーナーを実施したり、千葉県市川市にある卸市場で安曇野産農産物を販売するマルシェを実施したりといったことを行った。様々なところで、様々な形で、地域に合わせて安曇野を売り込むということが必要だと考えているので、これからも続けていきたい。

　安曇野は産地としてのブランド力があるため、その農産物使っている食品産業は価値があると評価していただいている。これを維持するには安曇野の自然や農地を守る必要がある。安曇野は背景に北アルプスがあり、その前に広大な田園地帯が広がっていて、縦

横に農業用の堰がある。この大自然と人の営みが作ってきた農業などとの組み合わせが安曇野の自然の根幹で、農業を続けることで安曇野の景観が守られ、水田をはじめとする農業による保水力というものが地下水の涵養にも役立っている。安曇野の価値・財産を守るためにも、農業の振興はもちろん、6次化といったことも検討が必要で、地場の食品メーカーと連携した仕組みが必要だと思っている。またJAがコンビニチェーンと連携し地場産品をコンビニの一コーナーに置いていたりするが、地産地消の取り組みを少しずつ進めるための有効な手段だと思う。

先日、横山タカコ先生に安曇野産農産物（お米、わさび、夏秋イチゴ、インゲン、玉ねぎ、放牧豚など）を使った和食フルコースのレシピを考案していただいた。安曇野の食材には素晴らしいものがあり、食卓に飾る花を含めて安曇野産のものだけでフルコースができるということをPRする企画。今後はフランス料理のフルコースと中華にも取り組む予定。調理師会の協力を得て、こういった料理を安曇野に食べに来てもらえるようにしたい。逆に横山たか子さんが月1回東京で開催している料理教室の枠の中で、安曇野にはこんな素晴らしい食材があるということをPRしていただいている。このように、一つは食べに来てもらう、一つは安曇野産の農産物を外にPRするというやり方をもう少し進めていきたい。イチゴなどお菓子の素材としても使えるということをPRしていきたい。

ただ、市内の産直センターなどでも原材料を加工した面白いもの作っているが、それを都市部に出荷しようと思うとロット数が必要で、1日100個程度では相手にしてくれず、その何十倍の量が必要になる。そこが大きなネックになるので、逆にここでしか食べられないから安曇野に来てくださいというPRの方がいい。安曇野に来て産直や6次産業としてやっているところを回るツアーを打ち出した方がいい。観光振興計画の中でもそういったものを盛り込みたいと思っている。産直や道の駅については横の連携も含めて考える必要がある。やはりどこかに一つできると他のところの売り上げは減る。同じパイを取り分けるのではなく、パイ全体を増やしていき共存する道を開く必要があり、そのためには同じ物ばかり売るのではなく、その産直の特色を出すことが必要。また今までは産直や道の駅は、どこかに行ったついでに寄って、買い物をするというパターンだったが、今は目的地として売り方をしているところもある。安曇野の場合は近くに観光地もあるので、目的地とまでは言わなくても、安曇野に行くからにはここに寄ると思ってもらえる産直を作る必要があると思っている。

農業の後継者問題

参加者　農業者が20年前より約半減しており、2035年にはほぼゼロになるという農林業センサスの統計データとなっている。安曇野の自慢の宝である田園風景を後世まで継続し守り抜くにはどうしていけばいいのか、かなり危機感を持っている。こういった田園風景を支えているのは土地利用型農業と言われる農業形態だと思っているが、有明地域には約1,000ヘクタールあり、10年後に10人程度しかいなくなってしまうと想定すると、一人当たり60～100ヘクタールを担う必要があるという状況が迫っている。約5年前から耕地林務課の多面的機能支払交付金を活用した事業を立ち上げ、280ヘクタールを143名で活動し、

農地保全に取り組んでいるが、それだけではなかなかうまくいかないのが実情で、手遅れにならないようにいろいろな手を打っていただきたい。

参加者　ここ5年ほどで農地面積が増えている一方、売上収益は下がっている。米価の低迷に加え、経費や肥料燃料資材の全てが高騰しており、昨年と比較し今年は15％の売り上げ減。面積が増えて仕事が増えたが、暮らしは楽にならず余計きつくなっている。農業面積が増えても収益が下がるとなると、他の人にやってほしいと進めることは難しい。

市長　直売所を増やすと言っても、農家が高齢化して後継者がおらず、農産物を卸す人がいないことが大きな問題になっているとあちこちで聞く。新規就農の促進はもちろん、小中学生が農業というのはどういうものか知る機会を設ける必要がある。僕らが子供の頃は、農家でない家は2軒ほどで、ほとんどが兼業農家で、田植えから稲作までやり方を見ていたが、今のお子さんたちは農家の子であっても、農業をほとんど知らないのが実情だと思う。そこで、今年度から有明あおぞら認定こども園の園庭に小さな田んぼを作り、種もみから田植え、稲刈り、脱穀に園児が取り組んだ。農家になるかは個人の自由だがそういった形でまず農業に親しんでもらい、子どもたちに農業がどう営まれているか知ってもらうことが基礎だと考える。そのためにも、南安曇農業高校はぜひ残していただきたいということを教育長にも知事も陳情している。学校のあり方はその地域にとって非常に大きな力があると思っており、高校再編でどういう形になるにせよ、農業を教える学校が地元に必要と考えている。農業はまず教育から始まり、やりたい方がいた時に、行政や地域がどれだけ手助けできるかということだと考える。

国の戦略として有機農業を進めることになっており、安曇野市でも有機米を学校給食に使う取り組みをしているが、まだ量としては足りないため、増やしていきたいと思っている。実は私の家も農家だが、農業をする時間がないため約20年前から合鴨農家に依頼し、無農薬、無化学肥料天日干しで、米を作ってもらっていた。依頼していた農家が手一杯になってしまい、後継者としてフィリピン人の方にお願いしている。日本語も上手でとても一生懸命で、やる気がある。教育によって若い人に就農の喜びを持ってもらうと同時に、一方でやる気のある海外の方に安曇野での農業を担ってもらうということも考えていく必要があると考える。今年の4月から安曇野は長野県の中では先駆けて国籍や人種、障害のあるなし、性別、性的指向、そういったことに関係なく個性を発揮できるまちづくりを目指そうという条例を作った。

課　長　今年から「弁当の日」として、生徒の人気投票で選ばれた食材を市が購入し生徒に提供するという取り組みを始めた。地元の農産物を生徒自ら調理をし、お弁当で食べることで食育にも繋がるという取り組みで、JA協力のもと今後も継続的に行っていきたい。また、調理師会でご尽力いただき小学校で実施している「味覚の授業」に、市で安曇野産食材を購入し提供するということも始めた。次代を担う生徒さんに安曇野市の農産物や農を身近に感じてもらい、安曇野市により一層愛着を持ってほしいという願いも込めて、取り組みに力を入れていきたい。

農地や道路の整備

参加者　自分の農地は隣接する荒廃農地からアレチウリといった厄介な雑草が侵入してくるため、耕作に余計な手間がかかって困る。市で地主や農地バンクと連携しながら適切な担い手の仲介を進めてもらいたい。市のホームページなどで農地の情報を知ることができれば相手も見つけやすいのではないか。また、住宅地の中にある細かい圃場は作業機が家の塀に当たりそうなほどで、圃場整備されたところに比べて作業性も悪くリスクも高い。景観保護の面ではそういった場所も耕作していかなければならないが、農家としてはつらいため、何かうまみがあればいいのではないかと考えている。

参加者　農業で使用する道路について、悪いのは農業者の方というのは十分承知しているが、特に田植えや稲刈りの時期には、道路に運搬車を停めて作業する場面が出てきてしまい、対向車とのすれ違いが困難な細い道で苦慮している。田植えや稲刈りの時期だけでも構わないので、市独自で農耕者優先の言葉をかけてもらえないか。反対車線は通れるようになっているため、混雑は避けられると思う。また、砂利採取作業が行われているところがあるが、舗装の痛みや田んぼのあぜにアスファルトの破片が混入し、草刈り作業が大変になっている所が多く見られるので、舗装の直しをしていただきたい。

参加者　田植えや稲刈りの時期には道路に泥が散乱してしまうことがあるが、収益が上がらない中必死に働いており、片付けにまで手が回らない現状がある。組織的にうまくできればいいと思っている。私も警察には何度も行き、一般企業がやっているように、例えばコーンや作業中看板を出して作業できないか相談したが、農業では申請できないと言われた。作業中看板を置いて作業してみたこともあるが、すれ違いができない時にクラクションを鳴らされたり怒鳴られたりというのが日常茶飯事。広域農道でトラクターで走っていたら後ろから激しくクラクションを鳴らされたりもする。警察からは農業車のためでもある道路ということで、何とかうまくやってくれと言われるが、一般の車はそう見てくれない。広域農道も昔はずっと農業者優先道路と書いてあったが、いつの間にか松川村との境のあたりにしか表示が無くなった。人を雇用して作業してもらう時に、「歩道に車を停めてくれ」とは言えないし、何かあった場合にはすべて農業者の責任になってしまう。きちんと農業という仕事ができる環境を整えていく必要があると思うが、どこに聞いてもどうしようもないと言われてしまう。

市長　市の広報で「農耕者優先でお願いします」と告知することはできるが、警察と相談した上でなければできないため、今後検討としたい。砂利採取に伴うコンクリートの破片については業者に言うしかないが、砂利採取の許認可を市で行っているため、指導することができる。後ほど具体的な場所を教えていただき、担当につなぐ。

部長　法令で定められている以上、道路上に車両を止めるということは許されておらず、農作業であっても許されないというのが警察の見解だが、法令で定められた道路の使用許可を取得すれば、一定期間公道に車両を止めて農作業することができるという制度もある。ただ手数料がかかり、当然安全管理をするという条件をクリアしなければならず、気軽に使うことは難しいと感じた。警察としては「通報があれば取り締まらなければいけない。摘発するためにパトロールするつもりはないが、公平な道路の交通行政を行う上では理解していただきたい」といった話があったと記憶している。ただ、農作業があるときには農道を使

う皆さんにもご理解をいただきたいといったことを農業再生協議会を通じてPRしているし、今後も続けていく。

市長　荒廃農地が非常に大きな問題で、具体的で効果的な方策はすぐには思いつかない。

参加者　農地を貸したい、借りたいという場合はどこで相談に乗ってもらえるか。

課長　各地域の農業委員に相談してもらればいい。農業委員を通じて貸し借りの情報をマッチングできれば一番ありがたい。また農業委員経由で農業委員会事務局が情報入手した段階で、適正な管理を依頼するといったこともある。また荒廃農地を借りて元に戻して営農するという場合には、条件にもよるが補助金がある。競争力の弱い圃場については、効果的な補助金等の制度設計がないのが実情。集約化をする場合、市でもなるべく近隣の農地や荒廃農地に関する情報提供をし、効果的に営農できるよう相談に応じていきたい。

三郷堆肥センターの機能継続

参加者　三郷堆肥センターが老齢化等で閉鎖になると、堆肥等の購入や散布等の作業をどう行っていくか困る。昨今の化学肥料の高騰や国が進めているみどりの戦略によると、今後有機農業の割合を2050年までに全体の30％にしたいという意向もあり、ますます飼料等の堆肥等の活用が重要になってくる。代替施設や市としての方向性について教えていただきたい。

課　長　堆肥センターは老朽化が激しく、耐震診断等を行った結果、全面的な建て替えが必要なほど傷んでいるとわかり、令和7年に廃止と決まった。廃止決定にあたり、搬入農家等に対し2分の1を補助する制度を安曇野市で創設し、現在1軒ずつ今後の経営計画をお伺いしながら、堆肥舎の建設をご相談させていただいている。そのため全体的な堆肥のボリュームが減るわけではないと思うが、配達といったことについては今まで通りとはいかないため、堆肥舎を建設した農家の堆肥を利活用していただければというところ。また「散布していただいていた」という話があったが、市の補助事業を利用して散布車を購入する酪農家の方もいる。

市　長　今日いただいたご意見の中でも勉強することがたくさんあった。皆様からのご意見を参考に、今後の政策を組み立てていきたい。